

安房中学の勤労働員 ～『学徒勤労働員日記 1945年』から

西村榮雄（女性の日記から学ぶ会）

私は1930（昭和5）年生まれ、1936年に船形尋常小学校入学、1942年に安房中学校の入学である。中学1、2年の時は授業があったが、戦争が激しくなると学徒も戦力の一翼を担うということで、3年から勤労働員となった。

軍事施設では館山海軍航空隊や館山海軍砲術学校、洲ノ埼海軍航空隊などに行った。洲ノ埼航空隊では地下壕を掘削して出た土砂を、中学生が2人1組になってモッコで運び出す作業であった。砲術学校では、高角砲陣地の造成工事や道路の付設工事などであった。

本土決戦準備の動員では、九重地区での塹壕工事に行き、その時の雰囲気では九十九里海岸や相模湾岸だけでなく、房総半島南部の安房地域もアメリカ軍の上陸が想定されていると身をもって感じた。アメリカ軍上陸では竹やりを持って「中学生一人がアメリカ兵一人を殺せ」という「一億総特攻」精神が求められた。学校では、生徒2人が丸太で抱えて戦車にもぐり込む突撃戦法のために、戦車に見立てたリヤカーを使って、真剣に訓練をしたことが忘れられない。

安房中学校3年生の時、木更津の第二海軍航空廠に勤労働員となった。同じ部屋にいた8人が一緒になり、『日記』を書くことを決め、ノートに書き始めた。毎日、仕事が終わってから、部屋において皆で車座となって『日記』を書いたのである。

第二海軍航空廠では空襲が激しくなったので地下壕を掘って地下工場にして、旋盤やフライス盤などの機械を運び込み、零戦エンジンの修理工場を始めた。戦地から来た零戦のエンジン外して、学生たちは分解や組立などの部分を担当し、整備・点検したエンジンをまた零戦に搭載するという。日本では一番大きい地下工場といわれていた。私はまだ15歳であり、国家のためという事で一生懸命に働いた。

1945年7月、山口県へと転校となり、『日記』は山口に持参した。他の同級生たちは終戦の時に、海軍の軍人が「日記を書いている者は全部出せ」「作業日誌から個人の日誌も全部提出しろ」と没収して、ガソリンをかけて燃やしたという。

働いていた地下工場のことはよく知っていたが、多くの人びとは時とともに忘れていく。そんな時に、地下工場跡があることや、掘削作業したのが強制連行された朝鮮の方々であることなど、地元の教師や市民たちによって調査活動が始まった。1990年代初め、このことが新聞に掲載され、当時の中学生などによる勤労働員の調査も熱心に取り組みされた。木更津高女生の一人は、戦後に書かれた「絵日記」を持っていた。

安房中学生ではただ一人、私が当時の『日記』を保管し持っていたので、ぜひ見せてほしいと依頼された。私は『日記』の内容を見せることはどうかと思ったが、リヤカーでセメント袋を運んだとか、一日一日の作業内容を詳しく記載してあり、とても貴重なものといわれて自費出版した。全国から求められ、今はとうとう無くなった。その後、『安房高創立百年史』に掲載され、戦時中の安房中生の勤労働員の姿を紹介する機会を得て「戦後70年」の証言者となった。

⇒【証言の会（録）P.31参照】